＋

２０２２年

６月第３・４週の主日礼拝説教要約

・６月１９日：マタイ福音書　７：７-１２.

「　ひとつの教え　」

・６月２６日：マタイ福音書　７：１-６.

「　神の目に映ること　」

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

説教《神の目に映ること・ひとつの教え》

あなた(主なる神)の目は人の子の全ての道を御覧になり、それぞれの道、その業の結ぶ実に応じて報いられます。

――エレミヤ書 32:19b, p. 1223.

全てを御覧になり、全てを御存じである神の目から人は逃れることはできません。それぞれに応じて報いられる神を前にして、人間には弁解の余地がありません。マタイ福音書は、他のどの福音書よりも、そのことを明確に記しています。「目には目を、歯には歯を」という、同害報復の規定は、神託の事実の有る無しにも拘らず、複数の古代の法典に記されています。キリストが、この教えに異義を唱え、終止符を打ったにもかかわらず、今日でも人類の脳裏に焼き付いて離れない悪しき害意の一つです。

世を愛された神、その独り子を賜ったほどに世を愛された神の御旨には、理想の世界があり、これを実現すべく、人類にも協力を求めておられます。しかし、御旨に従うべき人間が、諸悪の根源となっていることも少なくなく、神御自身に似せて造られたはずの人間は、変わり果てて度々、制御不能に陥り、天を裏切りつづけているのが現状です。今、現在、東欧における大混乱は、終息の目途が立ちません(2022年、夏)。紛争の発端は国境付近に混在する複数の民族の日常的な咥み合いが原因のようです。これが、後押しする大国による核の脅しにまで発展してしまうのです。

核が拡散した21世紀に、もし大国が互いに核のボタンを押し合うことになると、聖書に記された「最後の審判」を前に「死ねる者」と同時に裁かれるはずの「生ける者」が存在しなくなる恐れがあります。「目には目を、歯には歯を」を放置すると、世界はもはや、神の手に負えなくなってしまいます。

「最後の審判」が神の御旨である以上、人類が自ら手を下し、その妨げとなることは許されません。自分の目の梁を放置したままで、相手の全体像を直視することが困難であるのに、これを判断材料とし責任の擦り合いをしながら殺し合うのは、天の神の視線を無視した悪業三昧と言わざるをえません。これでは停戦交渉も人道回路も豚に真珠、絵に描いた餅と同じです。

終わりの日に世界が造り主なる神に明け渡される時に、人類が滅亡し

ていないことを祈るばかりです。

ローマ帝国の辺境の地でイエス・キリストが活躍した時代は、パクス・ロマーナと呼ばれた「ローマの平和」の時代でしたが、その内実はローマ人による、少数民族の殺戮が横行していた時代でもありました。帝国は殺戮の理由の一つとして、生き神であるローマ皇帝以外の別の神を信仰している人々を「無神論者」と決め付け、棄教しない者らを処刑したのです(殉教者の誕生)。こうした粛正の上に、「ローマ(帝国)の平和」が保持されなければならないと考えられていたようです。今も昔も平和の根拠は実に不可解です。

さて、マタイ福音書の７章は、以下のように締め括られています。

イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威あるものとしてお教えになったからである。（マタイ福音書７：２８-２９）

マタイ福音書の５章から始まり７章で終わる、所謂「山上の説教」で開示される、イエス・キリストの真意は全て、西暦７０年のエルサレム神殿崩壊後のユダヤ人のキリスト教徒の心の拠り所、生活の指針となります。この時に山上でイエスの言葉を聴いた「群衆」は、時が経ち、やがて福音書の「読者」に取って代わられますが、ローマ帝国軍の手により居住地を追われた人々の生活は、ますます困窮を極めておりました。子育て世代は、空腹の「自分の子供に良いものを与える」のに四苦八苦する事態に立ち至っていたのです。

居住地ばかりか定職をも失っていた彼らこそ、パンのみに生くるにあらざる人間の価値を深く理解した人々でした。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい、そうすれば、見つかる。門を叩きなさい。そうすれば開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見付け、門を叩く者は開かれる。

この神キリストの打開策こそ、彼らには不可欠の生きる手段となっていたのです。さまよえるユダヤ人とはならないために。

それから２０００年が経った今、人類は先の見えない混乱の２１世紀を生きています。混乱は何時、収拾に向かうのでしょうか？

人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

これぞ、求める者、門を叩く者への答えです。さらに、神が示される答えの背後にはかならず協力者としての神がおられます。人はその神の期待をも背負って生きる者なのです。